

(数カ月程度なら、現在の simple model でも良い)も、何らかの情報が得られるとの意見が強かった。

その他、G. Phillander が力説していたが、海洋の種々の観測(潮位、海面水温、海流、海面下の水温等)は、それぞれが独立してあるのではなく、総合されなければならない。そして、これを総合するものこそ、モデルであろう。この意味で、気象における現業の解析センターに対応する海洋の現業センターを早急に確立すべきであろう。

目標2は、我々がもっとも興味を持っているところで、全球規模での気候の dynamism を理解するという点で、今後の気象学の一つの中心課題となることであろう。

このように、モデルに関連した研究を促進する責任者として、TOGA-NEG (Numerical Experimental Group)

を結成することになった。このメンバーを見ると、全員が、海洋のモデラーで気象の人間は一人もいない。このことは、とりもなおさず、気象の人間にとっては、大気-海洋結合系にゆく前に、気象だけの問題としてやることが多くあり、この分野にそれ程の人々が参加していないことを意味する。しかし、その結果として、海洋学者が進める大気-海洋結合系は、実は、基本的には海洋モデルに重点があり、そこでの大気の役割は、完全に、海洋に規定されたものになりがちである。しかし、明らかに、数年程度の全球的な気候の変動が、熱帯域の海洋力学でだけ基本的に決まっているわけがない。むしろ、種々の境界条件を結びつけている大気の運動こそが、重要な役割を果している可能性が高い。

多くの気象学者のこの分野への参加を期待する次第である。

日本気象学会誌 気象集誌

第II輯 第64巻 第6号 1986年12月

高橋正明：過剰反射のないシア-不安定について

U.C. MOHANTY, A. KASAHARA and R. ERRICO：全球予報モデルにおける発散場の初期化への非断熱過程の影響

時岡達志・野田 彰：1月の大気大循環に及ぼす大規模山岳の効果：数値実験

永田 雅・猪川元興・吉住禎夫・吉田泰治：冬期日本海上の収束雲帯の形成について(数値実験)

木村富士男：関東地方に夜間できるメソスケールうずの形成メカニズム

久保田 効・今井博子：地球放射収支の海陸差

William H. KLEIN and Runhua YANG：ユーラシア大陸上の月平均地上気温と北半球 700 mb 高度場の関係についての総観気候学

新田 勲・丸山健人・元木敏博：静止気象衛星による雲風データを用いた西部太平洋域の循環場の長期変動の解析

村松照男：台風の多角形眼の構造

石原正仁・柳沢善次・榊原 均・松浦和夫・青柳二郎：2台のドップラーレーダーによって観測された台風降雨帯の構造

武田喬男・瀬古勝基：帯状対流性レーダーエコー群の形成維持過程

武田喬男・伍 培明・岡田菊夫：名古屋におけるエアロゾル光散乱係数の湿度による変化の測定

小林隆久：大気のエロゾルの有効複素屈折率の推定とその有用性 第1部 理論

小林隆久：大気のエロゾルの有効複素屈折率の推定とその有用性 第2部 観測

池田 弘・青島 武・三宅行美：新型日照計の開発

要報と質疑

廣田 勇・二木 徹：MUレーダーによって観測された対流圏・成層圏の慣性内部重力波